

日本語口答会話試験におけるバフチンの「対話性」の考察

著者	小村 親英
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	17
ページ	49-60
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005880/

日本語口答会話試験におけるバフチンの「対話性」の考察

小村親英

要旨

言語能力と言語運用の相互関係の考察に、口答会話試験を用いてその言語運用を評価する場合がある。発話行為を導く場面を設定し、対話を促す文法項目を前もってその試験の受験者に伝達して行うというものが多い。ただ、発話者が内化した言語知識(ラング)を用いて、恣意的な判断で発信するとされる発話活動(パロール)を、画一的な模擬会話での会話交流だけで評価していいものかどうかは常に疑問に残る。バフチンの唱える「対話性」に関する考察が、口答会話試験における評価方法の妥当性に一つの理論的根拠を提供している。本稿では、第二言語としての日本語中級レベルの敬語表現の口答会話試験を例解にして、その「対話的」な談話交流を考察するものである。

【キーワード】社会的言語、ことばのジャンル、宛名性、権威のことば、腹話術

1. はじめに

第二言語習得研究においては、学習者が目標言語の形式や規則を習得した言語能力を用いて発話できる発信能力を見極める評価方法を模索してきた。第二言語としての日本語習得研究においても、学習者の具体的な発信能力を適切に評価する方法の導入が考えられてきた。例えば、中級レベルの日本語敬語表現の形式や規則を学習者が習得する際に、その日本語敬語表現の発信能力を評価するために口答会話試験を用いる場合がある。口答会話試験を用いて学習者が習得した言語能力を如何に具体的な発話という形で発信することが出来るかを評価するということである。言い換えれば、学習者の発信能力を総合的に判断するために、言語能力と言語運用とを並置してその相互関係を見るということである。

ただ、口答会話試験を用いる際に問題になるのは、学習者が目標言語の形式や規則の情報を内化する方法(internalization)が画一的に統合されているものではなく、

その内化された情報の発信方法も不規則なままで統一された予測が不可能になってくるといことである。つまり、学習者個々人で異なった様相を持つ発信能力を口答会話試験での画一化された談話形式で、採点者が主観的に評価せざるを得ないという問題点が出て来ることになる。例えば、口答会話試験での敬語表現を評価する際に、「お名前は何か。」と言う質問を受験者にすると、「ジョンと申します。」という敬語表現を含む返答があれば、その敬語表現の形式と規則が適切に発信されているという評価を受けることになる。だが、試験官側の会話問題の作成から予期するものと、受験者の発信能力とが同じ発展導管(*conduit*)に無い場合があると問題が起こってしまう。例えば、「お名前は何か。」と言う同じ質問に対して、「ジョンと言います。」と敬語表現を含まない丁寧体だけの返答が返ってくるとその評価に困るのである。つまり、試験官の意図するもの（「～と申します」）が受験者の意図するものと合致しないわけである。そして、試験官の意図していたものと一致しなかったからと言って、受験者が敬語表現の形式や規則の情報を適切に内化していないとは必ずしも言えないのである。

言語能力と言語運用の関係については、ソシュールの言う「ラング」（言語使用者に共通する言語知識）と「パロール」（具体的な発話活動）の内方二元性(*inner duality*) (Holoquist, 1994)の様相を明確にするために様々な視野に立った多岐に渡る相互関係の研究がなされてきた。基本的には、言語知識「ラング」の習得に際しては、音声的、形式的、語彙的に共通した画一的分析方法が可能であるとする実証主義的な抽象的客観論を基本に置き、言語運用「パロール」に関しては、個々の差異・特異性に因り分析不可能とする現象論的な個人的主観論を基本に置いている (Saussure, 1996[1959])。それ故、言語発信能力を評価する口答会話試験では恣意的な発信過程を分析・評価することは難しくなってくる。

ロシアの記号論者であるバフチンは、その抽象的客観論と個人的主観論という内方二元性に対して「対話性(*dialogicality*)」という言語哲学的な考察を行い、新しい理論的方向性を提供している(Lantolf & Throne, 2006)。つまり、ソシュールの考えた二元的概念であるパラダイムを弁証法的(*dialectic*)に二項対抗したものと捉えるのではなく、対話的(*dialogic*)に反照し合うものと捉え再解釈しようというものである。言語能力の習得過程と社会的行為としての言語運用の発信過程とはそれぞれが独立した自律性のあるものではなく、「対話」を通して互いに影響を及ぼし合いながら存在する相互反照関係にあるものとするものである。言語は「対話性」の中で

即時的に状況付けられて起こって来るものであり、言語能力と言語運用との相互反照関係の中に位置していると主張するものである。

このバフチンの唱える「対話性」に触れる前に、まず第二言語習得研究分野でなされてきた言語能力と言語運用の関係の先行研究を簡約してみると次のようになる。

1.1 構造言語学的アプローチ

構造言語学の基調になる理論は二重層になっている。まず下層には、言語の基本構造というものが先在する規則に従って直線的に出来上がっているというものである。そして、その上層には、言語とはその先在する規則に従って行う社会的習慣であるとする習慣形成理論に則っている。この習慣形成理論に基づいてオーディオ・リングル・アプローチが考案されることになる(Richards & Rodgers, 2001)。行動主義心理学との連合から、「習慣」は、外界からの「刺激」によって触発される「反応」を通して繰り返し行うことによって形成されるというものである。この主張では、言語学習者は受動的な存在物と見なされ、使用者の動機・必要性など唯心論的考慮は不在になる。

1.2 唯心論的アプローチ

行動主義心理学に対して、1970年代に入り誤用分析(Ellis & Barkhuizen, 2005)などに始まる言語学習者の心理的戦略についての研究がなされるようになった。つまり、第二言語習得分野では、母国語から第二言語習得への移行過程で学習者の犯す間違いに注目し、その心理的戦略を統計的に分析するというものであった。ただ、この唯心論的主張では母国語から第二言語への移行過程では社会的・文化的要素の考察はなされていない。

1.3 言語人類学・民族誌学的(ethnographic)アプローチ

言語人類学・民族誌学の視点からは、言語構造は生得的に文化生成過程に組み込まれているものと捉え、実際に発話が行われる背景として、その世界観を反映したものであるとする文化相対主義の考察がなされた(後のサピア・ウォーフ仮説)(Duranti, 1997)。人類学的・民族誌学的アプローチを主な分析手段に用い、言語の持つ社会的意味と言語の相互作用を分析対象にするものであった。文化相対主

義の主張を基軸に第二言語習得研究では、発話行為理論(Speech Act Theory)(Searle, 1969)、発話の比較文化分析(Gudykunst, 1993)、語用論(Bardovi-Harlig, 2002; Green, 1996)などの言語の相互作用と社会文化的背景知識との関係を考察したものがある。ただ、文化相対主義での考察では言語学的構造と社会文化的要素がそれぞれ単独に孤立したものであるという認識があり、相互補完的要素がない分析単位として並置されているものである。

1.4 社会言語学的アプローチ

行動主義心理学的アプローチ、唯心論的アプローチに対抗して、基本的分析単位を言語の構造から社会的脈略の中で実際に使われている社会的意味に移すという社会言語学的考察がなされるようになった。社会言語学者は話者が社会・文化的環境の中で、どのように意味を生成する決断をするかについて注目した。つまり、言語構造の研究から社会的意味の生成過程に研究の焦点が移ることになった。そして、脈略的合図(contextualization cues)として話し手と聞き手がお互いに社会的意味を共有することで意味のある会話が成立すると主張するものである。

会話交流の社会的脈略を形成する背景には次の四つが考えられる。まず(1)会話の起こる社会空間的環境(スペース)、(2)会話参加者の身振り、振る舞い、(3)会話参加者の言語構造の選択・使用、そして、(4)会話参加者の会話環境に関わる背景知識などが挙げられる(Goodwin & Duranti, 1992)。さらに、会話参加者(話し手と聞き手)双方に共有される脈略的合図は次の四手段で伝達されることになる。まず(1)イントネーション・ストレス・アクセント・ピッチなどの韻律的要素、(2)テンポ・小休止・躊躇・抑揚・語調などのパラ言語学的要素、(3)コード・スイッチング、音声・音韻・形態論的選択などのコード選択、そして、(4)語彙・表現などの選択が挙げられる(Gumperz, 1992)。

言語能力と言語運用の関係についての社会言語学的考察は、会話交流が生成する社会・文化的背景から脈略的合図が送られてくると主張するものであるが、ただ、その送られて来る合図が会話参加者に画一的・直線的に内化されるという根拠の証明がなされていない。言語運用の背景として社会言語学的要素が研究されたが、談話交流において参加者がどのように脈略的合図を理解するのかが論証されていない。言い換えれば、言語運用での恣意性が撤去されたわけではないのである。

1.5 社会文化論的アプローチ

ロシアの記号論学者バフチンは、言語使用の条件から遊離した抽象的な言語の形態や意味と言ったものを考察することは非現実的・非人格的なものであるとし、発話(言語コミュニケーションの現実的単位)を分析の焦点に当てたのである(Wertsch, 1991; 邦訳『心の声』2004)。例えば、「ペンをお持ちですか。」という文章を形態的・語彙的分析による言語構造の視点から見るのではなく、その話者の「声(voice)」を聞き取ろうと言うものである。形態中心の言語分析はただの言語能力の抽象的な析出に過ぎない。発話環境に状況づけられ、人格化された具体的な発話を分析しなければならなくなってくる。つまり、「ペンをお持ちですか。」と言う発話行為は、発話者の「声」に注目すると、「ペンをお持ちですか。もし、お持ちならお借りできませんか。」という「嘆願」の「声」を伝えたかった発話行為かもしれない。また、ある人にとっては、「ペンをお持ちですか(もし、お持ちなら早くこの書類を書き上げてください)」という「催促」の「声」だったかもしれない。

発話は発話者の持つ社会文化的イデオロギーに基づいた個人的「声」を常に内包しているのである。ことばが現に存在するためには、ことばはかならずその主体である個々の話者の、具体的な発話のかたちをとらなければならない。ことばはつねに、一定のことばの主体による発話のかたちをとる。このかたちをとらずにことばは存在しえない」とバフチンは主張する(1986, p. 71; 邦訳『ことば 対話 テキスト』, p. 136)。ソシユールに始まる言語学者によると、意思を持つ主体としての話者が多種多様に使用するということから、言語運用(パロール)の分析には整合性と体系性がないカオスの状態であると考えられている。それに対して、バフチンは話者の個々の「声」は社会的言語との関連の中で規制されていて、そこにはある種の秩序が存在すると主張する。これは、現代に言う「語用論(pragmatics)」、「談話(discourse)」の研究に類似するものである。バフチンの発話分析は「超言語学(translanguistics)」と命名されて言語能力と言語運用との関係に新しい理論的洞察を提供している。

2. バフチンの超言語学

2.1 社会的言語

バフチンの「超言語学」の考察に欠かせないのが社会的言語という言語学的概念である。社会的言語とはある特定の社会文化的設定の下で、ある特定の社会的階層

の人々が行う特定の談話のことを言う(Wells, 2007)。社会的言語の具体的な例としては、法曹界とか医療界での専門家同士の談話などが挙げられる。また、年齢集団、ジェンダーに特有なことば、様々なサークルで流行しているような談話などもこの社会的言語の中に含まれる。特定された階層・グループの中でのみ状況付けられた言葉が使用され、その言葉を用いて特定の談話が特定の意味を持ってなされることになる。

バフチンのこの社会的言語と言う概念が、話者が個々人の自由意志で種種雑多に発信すると考えられてきた言語運用の不規則性にある規則性を提供するものなのである。個々の発話者が自由に創造することが出来るという偶然性に委ねてきたカオスの状態から、個々の発話は個人的なものであるにもかかわらず、社会的言語の枠組みの中である組織化されたパターンが生まれて来るというものである。発話に込められた話者の「声」の生成過程も、実は、恣意的に創造されるものではなく、ある特定の社会的言語の中でのみ状況付けられることになる。そして、その生成過程で意味を持つようになる「声」だけが談話として交流するというものである。社会的言語では、自由意志を持つ話者が独自の「声」を発信したいという遠心性と、社会的言語の中で状況付けがなされた意味に近づこうとする求心性の拘束力が同時発生的に働くわけである。

この「声」を発信する際の遠心性と求心性の同時発生的状況は話者が意識して行うものではない。つまり、ある特定の「声」を発信しようとして、話者が意識の中でその「声」を生成しても、もうすでにその生成過程には話者の属する社会文化的設定の中の社会的言語の枠組みの拘束的要素が含まれているのである。例えば、中学生のクラブ活動のようなある年齢集団でのみ活用されている社会的言語を考えてみると、ある特定の話者が「今日は何かおいしいものを食べよう」と他の話者(たち)に提案したとしても、その話者の発話の中にはその特定の集団でのみ可能となる意味の生成がもうすでに起こっているのである。つまり、『何かおいしいもの』と言っても、話者たちの経済的、年齢的、時間的制約がすでに込められている「何かおいしいもの」という「声」になるわけである。そして、その状況付けられた「声」に他の話者(たち)も経済的、年齢的、時間的制約を承諾した上での「何かおいしいもの」という「声(提案)」に反照して相互交流がなされるわけである。その集団の中でのみ理解し合える談話を通じて、話者の「声」は独自の意味を持つものとして無意識に相互交流がなされるのである。

2.2 ことばのジャンル

バフチンの「超言語学」で社会的言語と並行して重要になって来るのが「ことばのジャンル」という概念である。社会的言語ではある特定の社会文化的階層・集団が規則的に持っている拘束的特徴に焦点が当てられているが、「ことばのジャンル」では、ある特定の場面設定に焦点が当てられる。つまり、挨拶や送別、祝辞と言った、ある特定の場面でおこなわれる典型的な言語コミュニケーションの形態のことを言う。社会的言語の枠組みの中で出来上がっている「ことばのジャンル」もあれば、「ことばのジャンル」だけが社会的言語の枠組みの外で存在している場合もある。例えば、初めて訪れた訪問先での挨拶などは決まり文句として社会的言語の拘束に関わることなく典型的な形式を作っている場合が多い。また、あるグループ内での先輩・後輩の談話に至っては、そのグループが潜在的に持つ社会的言語の枠組みの中で、一定の先輩・後輩の典型的な場面で「ことばのジャンル」の言語コミュニケーションが発生するわけである。つまり、先輩としての典型的な談話形式があり、それに対応する後輩としての典型的な談話形式が存在するのである。

第二言語としての日本語教室での先生と生徒の談話は社会的言語の枠組みの中で「ことばのジャンル」を作っている。言語の形式や規則、さらにはその社会文化的要素を含めた言語運用を伝える先生側と、それを習得しようとする生徒側で相互活性化しながら作り出す社会的言語である。つまり、日本語教室での相互交流される談話は、日本の一般社会で用いられる日本語による会話ではなく、目標言語の習得のために充てられた特定の社会文化的枠組みを構成しているのである。そして、その社会的言語の枠組みの中で、教室で紹介される個々の文法項目によって、目標言語の運用される典型的な場面での「ことばのジャンル」が生成されるわけである。

3. バフチンの「対話性」

3.1 「宛名性」

バフチンの説く「超言語学」において、ある発話を分析する際に「だれに向けて発話がなされているか」を見る「宛名性(addressivity)」が重要になってくる(Moro, 2004)。つまり、どんな発話行為も宛先無しでは完成しないということである。言語分析として析出された単語や文は個人化されたものではなく、誰にも属さないし、また誰にも向けられていない。それに対して、発話にはその作成者と発話の宛先が常に存在するものである」(Bakhtin, 1986, p. 95)。発話行為の主体の話者はいつでも

特別の宛先をもって、特別の「声」を発信するのである。個々の発話は宛先として指定された他の会話参加者との関係の上に成り立っているのであって、その特別な宛先が不在の時はどんな発話行為も完成しないのである。宛先となる他の会話参加者は必ずしも面と向かって存在する話者である必要はなく、話者が「声」を作成する際に交渉する者ならば、そこに存在しない架空の存在物でもかまわない。

さらにバフチンは、ある一人の話し手の具体的な発話が別の人の発話と出遭い、相互活性化するものであると主張する。つまり、一つの発話はそれ自体独立して発信されるものではなく、そこには常に他の発話が連鎖の一環として存在していると言うのである。言い換えれば、発話の伝達内容である話者の「声」はつねに宛先の相手の「声」をすでに内包して発信されるものなのである。話者の「声」はすでに他者の「声」を含んで作り出されるものであって、発話行為そのものが対話の中で生成されるものなのである。これはバフチンが「対話性(dialogicality)」と呼ぶ概念であり、「宛名性」と深く関わりながら、言語コミュニケーション活動の形態を分析する超言語学の重要な要素を作っている。

3.2 権威性と腹話術

「対話性」と呼ばれ、「声」の生成過程に内包される他者の「声」の中には、その意味が固定されていて、二つの「声」が言語コミュニケーションの中で接触し、相互活性化がなされても、その意味を変えないものがある。それは、承認と受諾しか求めない権威的なことばである。つまり、大人が子供に対する時とか、先生が生徒に対する時のように、他者の「声」に接触しても、その「声」が持つ権威的な力によって意味を変えないものである。この権威的なテキストに置いては、バフチンの「対話性」は一方的な「声」の生成過程の中で行われ、そのテキストは社会制度的に確立された権威性の影響が及ぶところになる。そして、この権威的なことばはその社会制度的に確立された社会的言語の枠組みの中に無意識的に組み込まれているものなのである。言い換えれば、社会的言語の枠組みの中に、権威的なことばがその構成要素として特徴付けられるのではなく、権威的なことばそのものが社会的言語の枠組みを作り出す手助けをしているのである。

ただ、この権威的なテキストで行われる言語コミュニケーションには話し手と聞き手の両方の「声」が相互活性化されるとする「対話性」が失われているというわけではない。実は、権威的なことばの「声」をすでに内包してその権威者の「声」を代

弁するかのように発話の連鎖が起こるのである。つまり、「腹話術」(Bakhtin, 1994)のように、権威者の「声」を代弁しているのである。ある話者の「声」はその権威者である他者の「声」を聴いて、その他者が意味しようとする「声」を理解し、あたかもその権威者が発信するかのように、その「声」を自分の「声」として伝達するわけである。バフチンによると、二つの「声」が平行して独立した発話の連鎖は起こらないのである。例えば、日本語の教室では権威者である先生の「声」が、発話行為のための意味生成過程の中で伝達しようとする生徒の「声」の中に内包されているのである。先生が求めているものはこれに違いないと生徒が思考して、その先生の「声」が生徒の「声」として発話の連鎖の中で起こるのである。

4. 例解

日本語の敬語が適切に使えるかどうかを評価するための⁽¹⁾口答会話試験では、すべての言語コミュニケーションは人為的に作られた模擬会話の中の社会的言語の枠組みの中で行われる。つまり、その構成者は権威者である先生と受験者である生徒になる。先生と生徒の間には社会制度的、教育制度的に規制された「権威と受諾」という枠組みが潜在している。そして、その社会言語的枠組みの中で特別な場面を設定することで「ことばのジャンル」が創造される。言い換えれば、模擬会話という名目で口答会話試験を試行してみても、その先生と生徒が共に授業中に作り上げてきた社会文化的、歴史的要因によって出来上がった小社会の社会的言語が枠組みを設定しているのである。また、口答試験の目的である敬語表現の典型的な談話交流を評価するために、特別に、その談話を導く場面を「ことばのジャンル」として設定しているのである。

例えば、権威者である人の所に初めて訪問する生徒との会話を、日本語敬語表現の評価に焦点を当てて設定された模擬会話を使って考察してみると、次のようになる。

(約束の時間に遅刻して「謝罪」する表現から始まることを予期された模擬会話では次のよう発話行為の交流が行われることになる)

(1) 試験官：どうしたんですか。心配していたんですよ。

(2) 受験者：遅くなって申し訳ありません。バスが遅れてしまって、
約束の時間に来られませんでした。

- (3) 試験官：あ、そうですか。それは、たいへんでしたね。
- (4) 受験者：ええ。本当に、申し訳ありません。
- (5) 試験官：ところで、お名前は？
- (6) 受験者：はい、ジョンと申します。

(6)の発話で行われている敬語表現は、権威的テキストの中で権威者（先生）が期待している「声」を内包して伝達しているものである。つまり、その「声」の生成過程は授業中に創造された社会的言語の枠組みの制約を受けて、適切な言語の形式と規則、「～と申します」が使用されているわけである。言い換えれば、(6)は受験者個人の発話行為のようでありながら、実は、教室内で出来た小社会にだけ適応できる社会的言語の枠組みの中で出来ているのである。そして、その枠組みの拘束的状况の中にある規則性を持ったパターンを用い、権威者（先生）の「声」をすでに内包しているのである。

この模擬会話で一つ一つの発話を誰が行っているかと言えば、先生と生徒の二人が同時に行っているのである。先生は「この発話は敬語表現を導くためのものであるから適切に応答してくれるであろう」という願望を内に込めて「声」を発信し、生徒は「先生が期待しているものはこの表現だ」という確信を込めて「声」を発信するわけである。そして、これはバフチンの言う「権威のことば」と「腹話術」で要約されように、相互活性化して言語コミュニケーションの連鎖を生むのである。

5. まとめ

従来ある言語学では言語の形式や規則など「字義的」考察ばかりがなされてきたが、バフチンの唱える「超言語学」では、科学的分析が不可能とされている言語運用のカオスに社会的言語と「対話性」と言う概念を導入し、ある種の組織化された規則性の存在を提案している。そして、この提案は言語能力と言語運用との相互関係の評価に用いられる口答会話試験で、その評価方法の妥当性に理論的根拠を提供しているものなのである。つまり、個々人の自由意志で恣意的に発話がなされると言う根本理念を念頭に置きながらも、試験官（先生）と受験者（生徒）が授業中に作り上げてきた社会的言語の枠組みの中で、意味の生成過程が状況付けられ、その過程の中で意味が生成されると主張するものである。そして、その状況付けられた談話を通じて両者がある規則性を持って発話交流が行われ、言語コミュニケーション

ンの連鎖が起こるのである。その規則性に焦点を当てて評価をすればいいことになる。

注

- (1) 例解に使用する口答会話試験は関西外国語大学留学生別科、2006年度春学期会話レベル3の担当教員共同の作成によるものである。

参考文献

- Bakhtin, M. M. (1986). *Speech genres and other late essays* (C. Emerson & M. Holquist, Eds.; V. W. McGee, Trans.). Austin, TX: University of Texas Press.
- M. M. バフチン 新谷敬三郎ほか (訳) 1988 ことば 対話 テキスト (ミハイル・バフチン著作集 8) 新時代社.
- Bakhtin, M. (1994). The dialogic imagination. In P. Morris (Ed.), *The Bakhtin reader* (pp. 74-80). New York: Routledge.
- Bardovi-Harlig, K. (2002). Pragmatics and second language acquisition. In R. B. Kaplan (ed.), *The Oxford handbook of applied linguistics* (pp. 182-192). Oxford: Oxford University Press.
- Duranti, A. (1997) *Linguistic anthropology*. Cambridge, UK: Cambridge University.
- Ellis, R., & Barkhuizen, G. (2005) *Analysing learner language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goodwin, C., & Duranti, A. (1992). Rethinking context: An introduction. In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon* (pp. 1-42). New York: Cambridge University Press.
- Green, G. M. (1996). *Pragmatics and natural language understanding*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Gudykunst, W. B. (1993). Introduction. In W.B. Gudykunst (ed.), *Communication in Japan and the United States* (pp. 3-17). Albany, NY: State University of New York Press.
- Gumperz, J. J. (1992). Contextualization and understanding. In A. Duranti & C.

- Goodwin (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon* (pp. 229-252). New York: Cambridge University Press.
- Holoquist, M. (1994) *Dialogism: Bakhtin and his world*. New York: Routledge
- Lantolf, J. P., & Thorne, S. L. (2006) *Sociocultural theory and the genesis of second language development*. Oxford: Oxford University Press.
- Moro, Y. (2004). The expanded dialogic sphere: Writing activity and authoring of self in Japanese classroom. In Y. Engeström & R. Miettinen & R. Punamäki (Eds.), *Perspectives on activity theory* (pp. 165-182). Cambridge: Cambridge University Press.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2001). *Approaches and methods in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Saussure, F. (1996[1959]) *Course in general linguistics* (C. Bally, A. Sechehaye., & A. Riedlinger, Eds.; R. Harris, Trans.). Chicago: Open Court.
- Searle, J. R. (1969) *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wells, G. (2007). The mediating role of discoursing in activity. *Mind, Culture, and Activity* 14, 160-177.
- Wertsch, J. V. (1991b). *Voices of the mind: A sociocultural research*. Cambridge, MA: Harvard University Press. ジェームス・ワーチ 田島信元ほか(訳) 2004 心の声 福村出版.

(ckomura9@kansai-gaidai.ac.jp)